

## 「方法」講義立会記

伊藤聖来

まず、私は現代の芸術に関してあまり関心を抱いていないということをご承知いただきたいと思います。そのため、当然ながら芸術に関する知識もほとんどなく、有している知識も偏りのあるものとなっていると思います。そんな私がなぜこの講義を受講するにいったのか、ということから説明します。

私は本学の文学部キリスト教学科に所属しております。キリスト教学科の授業科目の中には、キリスト教美術を扱うものがあります。昨年の後期に私はそれを受講しました。キリスト教美術の講義なので、出てくるのは歴史的また宗教的な作品ばかりで、中ザワ先生には直接つながりません。しかし、この講義を受講したことが間接的な契機となります。

キリスト教美術の講義が先生のご都合で一度休講になったことがありました。その一回分の講義に代わるものとして、先生が「どこでもいいから美術館に行って、その展評を提出する」という課題を出されました。美術館というと上野くらいしか思い浮かず、また高い料金を払ってまで芸術に触れようという意識のない私は、この課題をどう乗り切ろうか考えあぐねました。その結果、著名な作品を見てもどうせ「すごかった」しか書くことが浮かばないだろうから、通学路の途中にあつて料金の安い美術館に行こうと思い至りました。そして私が足を運んだのが、吉祥寺美術館でありました。当時、吉祥寺美術館では中ザワ先生による「脳で見るアート」の展示が行われており、私はその展示を鑑賞し、展評を書きました。そのため、今年度のシラバスの講師欄に「中ザワ」という妙な名前があるのを見た時は、非常に驚きました。これも何かの縁だろうと、不思議な偶然に脳内でアドレナリンが出ているのを感じながら、受講することを決めました。

このような偶然に導かれて受講した授業ではありますが、いかんともしがたい。いかんともしがたい、と感じています。中ザワ先生に関する知識も、もちろん「方法」に関する知識も何も持たずに、「脳で見るアート」の展示を観た私は『セル』や『灰色絵画』の配色や『シリョクヒョウ』、『アナグリフの穴』といった作品から何かポップな印象を中ザワ先生に対して抱いていました。しかし、受講してみた講義にはポップなものは何一つありませんでした。

授業は今のところ、ただ淡々と「方法」について、その歴史を知るだけのものです。「方法」のメンバーであった中ザワ先生が自身の「方法」における活動を総括する目的があるため、そうなるのは仕方ないことです。また、何かの歴史を知るということは大変意義深いことです。その歴史を作った人がどのようなことを考え、どのようなことをどんな人から受け継いで生きてきたのか、人の歴史を知るということは生き方を知ることだと思っています。しかし、興味を持たない人間にはその歴史自体が何か恐ろしいものを感じられてしまうこともあるのではないのでしょうか。私は芸術というものも、芸術家という生き物もよく知りません。この講義を受講する前には、それを知る機会になるかもしれないと思っ

ていましたが、実際はそう優しくありませんでした。残念ながら私は「方法」とどう向き合い、どのようなリアクションを取るべきなのか、わかりません。何もわからないからこそ恐ろしいのです。自分の知らない世界への扉を開けてしまったことに対する恐怖が、何回も講義を受けた今でも続いています。

うす暗く、来るものを拒み、去る者を追わない。開かれているようで、閉じているような、あの雰囲気は、私の一週間の中に異様な存在感を放っています。出席も取らず、ただ先生が淡々と講義をする授業なのに、何が起きるかわからない不安がどこかにある。まるでサスペンスのような授業だと勝手に感じています。